

5. 気体の法則と性質

56. 気体のグラフ

ボイル・シャルルの法則

$$\frac{PV}{T} = \text{一定} \quad (\text{理想気体なら } \frac{PV}{T} = nR)$$

温度一定の条件下では、 $PV = \text{一定}$ がボイルの法則

圧力一定の条件下では、 $\frac{V}{T} = \text{一定}$ がシャルルの法則

ボイルの法則の式とシャルルの法則の式について聞かれることがあるので注意

ボイル・シャルルの式だけを覚えればよいというわけではない。

より、

$$\frac{PV}{T} = k \quad (k \text{ は正の定数}) \text{ とおく。}$$

数学の2変数の陰関数 $z = f(x, y)$ の問題を解くときのテクニックに、 x, y の一方を定数扱いし、

1変数関数として扱うのがあるが、科学においても、変数が3つある関係式の場合、

1つの変数を定数扱いし、2つの変数の関係について調べるのが常である。

(i)

P と V の関係 (温度一定の条件下)

グラフ(a), (b), (f)の正誤

(a)の正誤

$$\frac{PV}{T} = k \text{ より, } P = kT \cdot \frac{1}{V}$$

P は $\frac{1}{V}$ に比例するから、グラフの形は正しい。

ところが、 $T_1 > T_2$ より、比例定数は $kT_1 > kT_2$ である。

したがって、グラフの傾きは、温度が T_1 のときの方が大きくなければならない。

よって、(a)は誤

補足：横軸を V にせず、 $\frac{1}{V}$ にする理由

実験データをグラフで解析する場合、直線グラフの方が解析しやすい。

したがって、グラフが直線になるよう、変数 x をそのまま x 軸とせず、

$\frac{1}{x}$ 軸、 $\log x$ 軸、 $\ln x$ 軸などにする場合がある。

たとえば、 $y = k \log x$ ならば、縦軸を y 、横軸を、横軸を $\log x$ とすると、

y と $\log x$ の比例関係を表す直線グラフになるので、データ解析が楽である。

(b)の正誤

$V = \frac{kT}{P}$ より, V と P は反比例のグラフになる。よって, (b)は誤

(f)の正誤

$V = \frac{kT}{P}$ より, V と P は反比例のグラフになるから, グラフの形は正しい。

$T_1 > T_2$ より, 比例定数は $kT_1 > kT_2$ である。

よって, P が同じとき, $\frac{kT_1}{P} > \frac{kT_2}{P}$ とならなければならない。

よって, (f)は誤

(ii)

V と T の関係 (温度一定の条件下)

グラフ(c), (e)の正誤

$\frac{PV}{T} = k$ より, $V = \frac{k}{P} \cdot T$

$P_1 > P_2$ より, 比例定数は, $\frac{k}{P_1} < \frac{k}{P_2}$

よって, 直線の傾きは, P_2 のときの方が大きい。

ゆえに, (c)が正

(iii)

P, V, T の関係

グラフ(d)の正誤

1mol の理想気体だから, その状態方程式は, $PV = RT$ (R は気体定数)

よって, $\frac{PV}{RT} = 1$

ゆえに, (d)は正

(i) ~ (iii) より, 正しい関係を表しているグラフは, (c)と(d)

補足

ボイルの法則 (1662 年 ボイル イギリス)

温度一定のとき、一定質量の気体の圧力とその体積は互いに反比例する。

ゲイ・リュサックの第一法則 (シャルルの法則)

定圧条件下で、 0°C および $t^{\circ}\text{C}$ のときの気体の体積をそれぞれ V_0 , V_t とすると、

$$V_t = V_0 \left(1 + \frac{t}{273} \right)$$

簡単にいえば、

「定圧条件下では、気体の体積の変化は温度変化に比例する」

ということ。

この法則は 1787 年にシャルルによって発見され、

1802 年にゲイ・リュサックによって精密に確立された。

尚、ゲイ・リュサックは「気体反応の法則」で有名

気体反応の法則 (ゲイ・リュサックの第二法則) (1805 年 ゲイ・リュサック フランス)

いくつかの気体が同温同圧条件で反応するとき、

反応物および生成物の体積は簡単な整数比になる。

たとえば、水素と酸素が反応し、水蒸気ができる反応では、

反応する水素と酸素、生成する水蒸気の体積は、

同温同圧で、 $2:1:2$ という簡単な整数比になる。

これをもとにして「アボガドロの法則」が導かれたともいえる。

57. 気体の体積・分子量・混合気体

(1), (2)

R の値を使うと計算が面倒になるので、できるだけ R の値を使わずにすむようにする。

つまり、

ボイル・シャルルの法則

$$\frac{PV}{T} = \text{一定}$$

理想気体の状態方程式の変形式

$$\frac{PV}{nT} = \text{一定} (= R)$$

を活用する。

(3)

補足

混合気体の扱い方

分圧

混合気体の全体積（混合気体の入った容器の体積と等しい）を保ったまま、

その成分気体 i だけにしたとき、その成分気体 i が示す圧力を、気体 i の分圧という。

気体 i の分圧を p_i とすると、

$p_i = \text{気体 } i \text{ のモル分率} \times \text{混合気体の圧力 } P$ （全圧）

$$P = \sum p_i$$

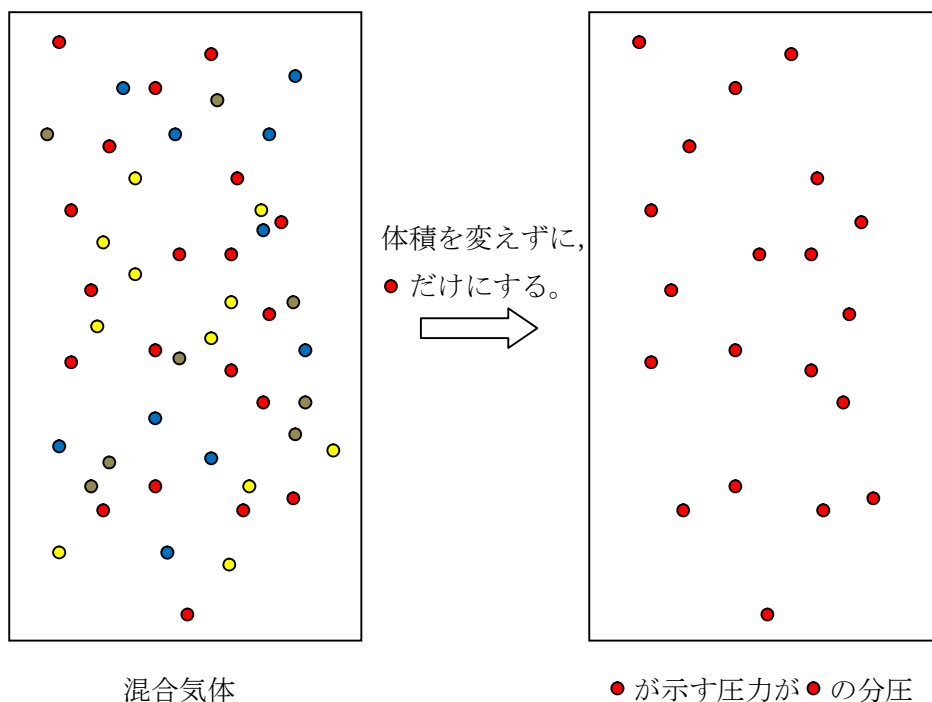
$$\begin{aligned} \because PV &= (n_1 + n_2 + \dots + n_i + \dots)RT \\ &= n_1RT + n_2RT + \dots + n_iRT + \dots \\ &= p_1 + p_2 + \dots + p_i + \dots \\ &= \sum_{i=1} p_i \end{aligned}$$

また、

$$\frac{p_i}{P} = \frac{n_iRT}{(n_1 + n_2 + \dots + n_i + \dots)RT} = \frac{n_i}{n_1 + n_2 + \dots + n_i + \dots} = \frac{n_i}{\sum_{i=1} n_i} = \text{気体 } i \text{ のモル分率}$$

より、

$p_i = \text{気体 } i \text{ のモル分率} \times \text{混合気体の圧力 } P$ （全圧）



分体積 (適当な用語が見つからなかったので、勝手に名付けた)

混合気体の圧力を保ったまま、その成分気体 i だけにしたとき、

その成分気体 i が示す体積を、成分気体 i の分体積という。

気体の分体積を v_i とすると、

$v_i =$ 気体 i のモル分率 \times 混合気体の体積 V

$$V = \sum v_i$$

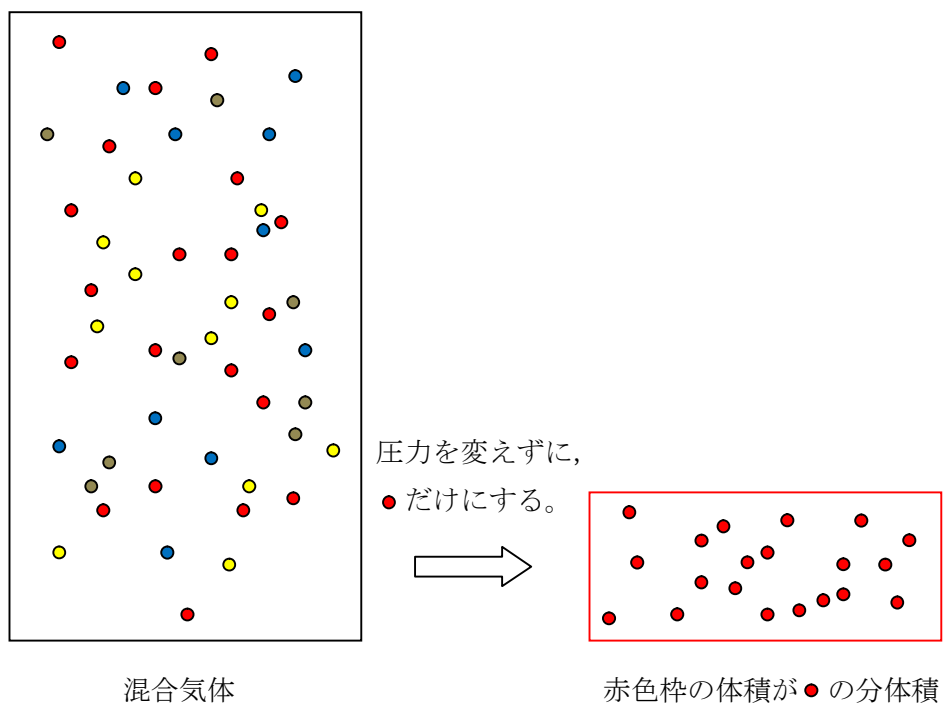
$$\begin{aligned} \therefore V &= \frac{(n_1 + n_2 + \dots + n_i + \dots)RT}{P} \\ &= \frac{n_1 RT}{P} + \frac{n_2 RT}{P} + \dots + \frac{n_i RT}{P} + \dots \\ &= v_1 + v_2 + \dots + v_i + \dots \\ &= \sum_{i=1} v_i \end{aligned}$$

また、

$$\frac{v_i}{V} = \frac{\frac{n_i RT}{P}}{\frac{(n_1 + n_2 + \dots + n_i + \dots)RT}{P}} = \frac{n_i}{n_1 + n_2 + \dots + n_i + \dots} = \frac{n_i}{\sum_{i=1} n_i} = \text{気体 } i \text{ のモル分率}$$

より、

$v_i =$ 気体 i のモル分率 \times 混合気体の体積 V



58. 分圧の法則

与えられた気体定数 R の単位は、 $\frac{\text{L} \cdot \text{Pa}}{\text{K} \cdot \text{mol}}$ だから、

圧力の単位は Pa、体積の単位は L を使う。

(3)

$$\text{操作前の } \frac{PV}{nT} = \frac{4.0 \times 10^5 \text{ Pa} \cdot V}{2.0 \text{ mol} \cdot 300 \text{ K}}$$

$$\text{操作後の } \frac{PV}{nT} = \frac{x \text{ Pa} \cdot V}{(2.0 + 4.0) \text{ mol} \cdot 300 \text{ K}}$$

(ただし、気体の体積 $V =$ 容器の体積 $= 12 \text{ L}$)

$$\frac{PV}{nT} = \text{一定} (= R)$$

より、

$$\frac{4.0 \times 10^5 \text{ Pa} \cdot V}{2.0 \text{ mol} \cdot 300 \text{ K}} = \frac{x \text{ Pa} \cdot V}{(2.0 + 4.0) \text{ mol} \cdot 300 \text{ K}}$$

$$\therefore x = 1.2 \times 10^6$$

よって、全圧は、 $1.2 \times 10^6 \text{ Pa}$

補足

理想気体の状態方程式の変形式

$$\frac{PV}{nT} = \text{一定} (= R)$$

を使うと、気体定数を使わずにすむ。

また、 P, V の単位については、

$$\frac{P_1 V_1}{n_1 T_1} = \frac{P_2 V_2}{n_2 T_2} \text{ のとき、両辺の単位をそろえさえすればよい。}$$

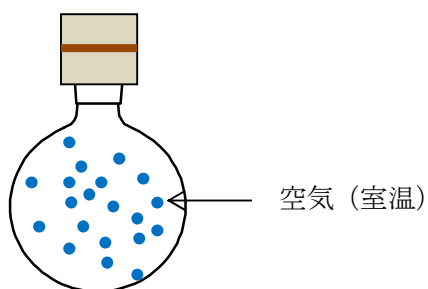
何も考えずに、計算が面倒な $PV = nRT$ を使用してはいけない。

61. 液体の分子量の測定

操作①

アルミ箔+フラスコ+輪ゴム+フラスコの中の空気=237.6g ……①

また、アルミ箔に穴が開いているので、「大気圧=フラスコ内の空気圧」である。



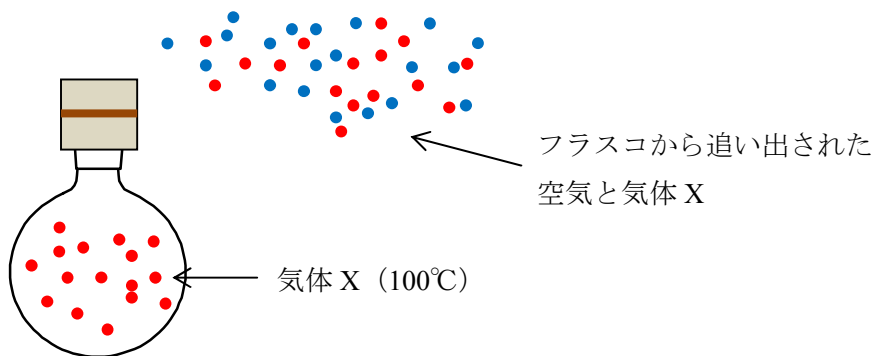
操作④

フラスコの中の空気が X の蒸気により追い出され、フラスコの中が X の蒸気で満たされる。

また、アルミ箔に穴が開いているので、「大気圧=100℃の気体 X の圧力」である。

ただし、問題文には記されていないが、操作②でフラスコに入れた液体 X は、

操作④でフラスコ内の空気をすべて追い出すのに、十分量あったものとする。



操作⑤

気体 X が凝縮し、液体になる。

すると、フラスコ内の気圧が小さくなるので、

フラスコ内の気圧が大気圧と等しくなるまで、外からフラスコ内に空気が入る。

したがって、フラスコ内は、液体 X と飽和蒸気圧の気体 X と空気で満たされる。

よって、

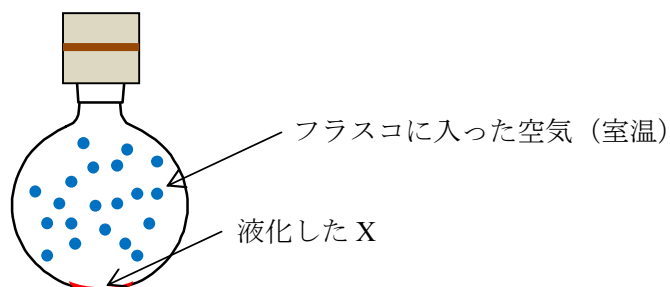
アルミ箔+フラスコ+輪ゴム+フラスコの中の空気+X=240.1g ……②

液体の体積が無視できるなら、「大気圧=X の飽和蒸気圧+空気圧」である。

しかし、この問題では、X の蒸気圧が与えられていないし、事実(2)で、

「X の蒸気圧は無視できるものとする。」とあるから、式②の X はすべて液体である。

「大気圧=X の飽和蒸気圧+空気圧」についても「大気圧=フラスコ内の空気圧」となる。



操作⑥

フラスコ内の容積が 1320mL である。

「容器の体積=容器内の気体の体積」より、
フラスコ内の気体の体積も 1320mL である。

(1)

式②-式①より、

$$\text{液体 X の質量} = 240.1 - 237.6 = 2.5\text{g}$$

となることを説明すればよい。

(2)

操作④において、

フラスコ内の気体の体積は、操作⑥より 1.320L であることがわかる。

気体 X の温度 = $100^{\circ}\text{C} = 373\text{K}$

気体 X の質量は、(1)より、2.5g であることがわかる。

気体 X の物質量は、X の分子量を M とすると、 $\frac{2.5}{M}\text{mol}$

理想気体の状態方程式より、

$$1.01 \times 10^5 [\text{Pa}] \times 1.320 [\text{L}] = \frac{2.5}{M} [\text{mol}] \times 8.31 \times 10^3 [\text{L} \cdot \text{Pa} / (\text{K} \cdot \text{mol})] \times 373 [\text{K}]$$

$$\therefore M = 58.1$$

補足

試料 X の蒸気圧が与えられている場合の解き方

条件

大気圧 P_0 [Pa], 室温 T_1 [K], 試料 X の室温における蒸気圧 p_X [Pa], フラスコ内の体積 V [L]

操作①の全質量 W_1 g, 操作⑤の全質量 W_2 g

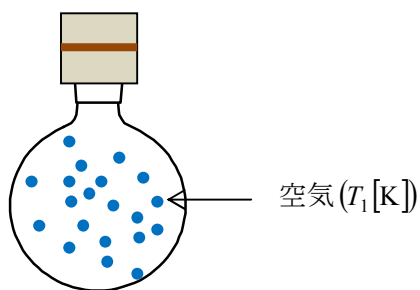
フラスコ内の温度が T_2 [K] であるのは, 操作④のときだけする。

また, アルミ箔の栓には穴が開いており, 空気は乾燥しているものとする。

操作①

アルミ箔+フラスコ+輪ゴム+フラスコの中の空気 = W_1 g ……①

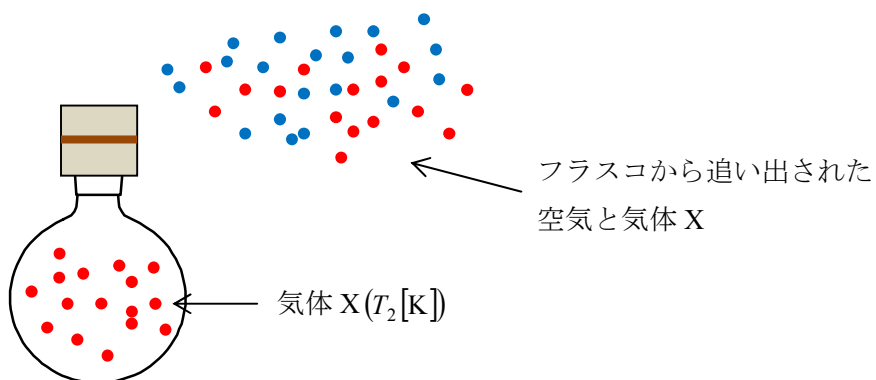
また, アルミ箔に穴が開いているので, 「大気圧 = フラスコ内の空気圧」である。



操作④

フラスコの中の空気が X の蒸気により追い出され, フラスコの中が X の蒸気で満たされる。

また, アルミ箔に穴が開いているので, 「大気圧 = T_2 [K] の気体 X の圧力」である。



操作⑤

気体 X が凝縮し、液体になる。

すると、フラスコ内の気圧が小さくなるので、

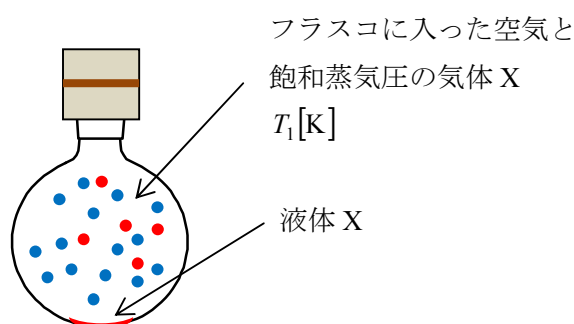
フラスコ内の気圧が大気圧と等しくなるまで、外からフラスコ内に空気が入る。

したがって、フラスコ内は、液体 X と飽和蒸気圧の気体 X と空気で満たされる。

よって、

アルミ箔+フラスコ+輪ゴム+フラスコの中の空気+X = W_2 g ……②

液体の体積が無視できるなら、「大気圧 = X の飽和蒸気圧 + 空気圧」である。



ここで、操作①のフラスコ内の空気の質量と操作⑤のフラスコ内の空気の質量を、それぞれ、 w_1 g, w_2 g とおくと、

式② - 式① = $W_2 - W_1 = X$ の質量 + $w_2 - w_1$

$\therefore X$ の質量 = $W_2 - W_1 + (w_1 - w_2)$ ……③

よって、 $w_1 - w_2$ さえ得られれば、

操作④のフラスコ内の気体 X の状態方程式から、X の分子量が求められる。

式③で求めた X の質量を w_X , X の分子量を M_X とおくと、

アルミ箔に穴が開いているので、「大気圧 = T_2 [K] の気体 X の圧力」より、

フラスコ内の気体 X の状態方程式は、

$$P_0 V = \frac{w_X}{M_X} RT_2$$

$$\therefore M_X = \frac{w_X RT_2}{P_0 V}$$

したがって、この問題で鍵となる値は、 $w_1 - w_2$ である。

では、 w_1 の求め方と $w_1 - w_2$ の求め方について、順に説明する。

w_1 の求め方について

求め方 1

空気の分子量が問題文に与えられているか分子量が与えられた条件から求められるとき

空気の分子量を M とすると,

$$P_0V = \frac{w_1}{M} RT_1 \text{ より, } w_1 = \frac{M}{RT} P_0V \text{ [g]}$$

求め方 2

室温 T_1 [K] における空気の密度 d [g/cm³] が与えられているとき,

フラスコ内の体積 V [L] を単位 cm³ で表すと、 $1000V$ [cm³] だから,

$$w_1 = 1000Vd \text{ [g]}$$

$w_1 - w_2$ の求め方について

求め方 1

同温・同体積の条件下では,

$$\text{空気のモル分率} = \frac{\text{空気の分圧}}{\text{全圧}} \text{ だから,}$$

操作①の空気のモル分率は 1, 操作⑤の空気のモル分率は $\frac{P_0 - p_X}{P_0}$ である。

よって, 操作①の空気の物質量を n_1 とすると, 同温・同体積の条件下だから, 操作⑤のフラスコ内の気体の物質量も n_1 である。

よって, 操作⑤のフラスコ内の空気の物質量 $n_2 = \frac{P_0 - p_X}{P_0} n_1$

ここで, 空気の分子量を M とおくと,

$$n_2 = \frac{w_2}{M}, \quad n_1 = \frac{w_1}{M} \text{ だから, } \frac{w_2}{M} = \frac{w_1}{M} - \frac{p_X}{P_0} \frac{w_1}{M}$$

よって,

$$w_2 = w_1 - \frac{p_X}{P_0} w_1$$

ゆえに,

$$w_1 - w_2 = \frac{p_X}{P_0} w_1$$

求め方 2

式①と式②のフラスコ内の空気の物質量をそれぞれ n_1 , n_2 とすると,

式①の空気の圧力 = 大気圧 = P_0

式②の空気の圧力 = $P_0 - p_X$

$$\frac{PV}{nT} = \text{一定} (= R) \text{ より,}$$

$$\frac{P_0 V}{n_1 T_1} = \frac{(P_0 - p_X) V}{n_2 T_1}$$

$$\therefore \frac{P_0}{n_1} = \frac{P_0 - p_X}{n_2}$$

$$\therefore n_2 = \frac{P_0 - p_X}{P_0} \cdot n_1 = n_1 - \frac{p_X}{P_0} n_1$$

ここで、空気の分子量を M とおくと、

$$n_2 = \frac{w_2}{M}, \quad n_1 = \frac{w_1}{M} \text{ だから, } \frac{w_2}{M} = \frac{w_1}{M} - \frac{p_X}{P_0} \frac{w_1}{M}$$

よって、

$$w_2 = w_1 - \frac{p_X}{P_0} w_1$$

ゆえに、

$$w_1 - w_2 = \frac{p_X}{P_0} w_1$$

例題

以下の条件から X の分子量を有効数字 3 桁で求めると 156 であることを確かめよ。

条件

気体定数 $R = 8.30 \times 10^3 \text{ [Pa} \cdot \text{L}/(\text{K} \cdot \text{mol})]$, 大気圧 $1.00 \times 10^5 \text{ Pa}$, 室温 300K ,

フラスコ内の体積 100mL , 大気圧下の空気の密度 1.10g/L ,

試料 X の室温における蒸気圧 $1.20 \times 10^4 \text{ Pa}$,

操作①の全質量 30.000g , 操作⑤の全質量 30.494g

フラスコ内の温度が 370K であるのは操作④のときだけ

また、空気は乾燥しているものとする。

63. 混合気体の圧力

(1)

理想気体の状態方程式の変形式 $\frac{PV}{nT} = \text{一定}$ を使う。

T が一定だから、 $\frac{PV}{n} = \text{一定}$ である。

A の水素の物質量を x 、B のエチレンの物質量を y とすると、

$$\frac{2.00 \times 10^5 \cdot V_A}{x} = \frac{3.00 \times 10^5 \cdot V_B}{y} = \frac{2.67 \times 10^5 (V_A + V_B)}{x + y} \text{ より,}$$

$$\frac{2.00 \cdot V_A}{x} = \frac{3.00 \cdot V_B}{y} = \frac{2.67(V_A + V_B)}{x + y} = k \text{ とおくと,}$$

$$2.00V_A = kx \quad \dots \textcircled{1}$$

$$3.00V_B = ky \quad \dots \textcircled{2}$$

$$2.67(V_A + V_B) = k(x + y) \quad \dots \textcircled{3}$$

①+②より、

$$2.00V_A + 3.00V_B = k(x + y) \quad \dots \textcircled{4}$$

③-④より、

$$0.67V_A - 0.33V_B = 0$$

$$\therefore 0.67V_A = 0.33V_B$$

よって、

$$V_A : V_B = 0.33 : 0.67 \approx 1 : 2 \quad \dots \text{(答)}$$

(2)

方針

容器 B 内の物質は、すべて気体だから、それぞれの物質数 n は、

p をその物質の分圧とすると、 $n = \frac{V_B}{RT} \cdot p$ と表せる。

$\frac{V_B}{RT}$ は一定だから、 n は p に比例する。

したがって、物質数の代わりに、分圧 p を化学量論的に扱ってよい。

コックを開放したときの水素の分圧とエチレンの分圧

$\frac{PV}{nT} = \text{一定}$ について、絶対温度 T とそれぞれの物質数 n は変化しないから、

コック開放前と開放後の水素、エチレンについて、それぞれ、 $PV = \text{一定}$ が成り立つ。
よって、コック開放後の水素、エチレンの分圧をそれぞれ p_{H_2} 、 $p_{\text{C}_2\text{H}_4}$ とすると、

$$2.00 \times 10^5 \cdot V_A = p_{\text{H}_2} (V_A + V_B)$$

$$3.00 \times 10^5 \cdot V_B = p_{\text{C}_2\text{H}_4} (V_A + V_B)$$

ここで、(1)より、 $V_B = 2V_A$ 、 $V_A + V_B = 3V_A$ だから、

$$2.00 \times 10^5 \cdot V_A = p_{\text{H}_2} \cdot 3V_A$$

$$3.00 \times 10^5 \cdot 2V_A = p_{\text{C}_2\text{H}_4} \cdot 3V_A$$

よって、

$$p_{\text{H}_2} = \frac{2.00}{3} \times 10^5 \text{ Pa}$$

$$p_{\text{C}_2\text{H}_4} = 2.00 \times 10^5 \text{ Pa}$$

気体分子は容器 A, B 内で一様に分布するから、
コックを閉じた後の反応前の容器 B 内の分圧も

$$p_{\text{H}_2} = \frac{2.00}{3} \times 10^5 \text{ Pa}, \quad p_{\text{C}_2\text{H}_4} = 2.00 \times 10^5 \text{ Pa} \text{ である。}$$

したがって、これが反応前の分圧となる。

	C_2H_4	+	H_2	→	C_2H_6
反応前の分圧	2.00×10^5		$\frac{2.00}{3} \times 10^5$		0
変化	$-\frac{2.00}{3} \times 10^5$		$-\frac{2.00}{3} \times 10^5$		$+\frac{2.00}{3} \times 10^5$
反応後の分圧	$\frac{4.00}{3} \times 10^5$		0		$\frac{2.00}{3} \times 10^5$

より、

反応後の容器 B 内の気体の全圧は、

$$\frac{4.00}{3} \times 10^5 + \frac{2.00}{3} \times 10^5 = 2.00 \times 10^5 \text{ Pa} \quad \dots \text{(答)}$$

66. 理想気体と実在気体

A. 標準状態における気体 1mol の体積

標準状態における気体 1mol の体積は気体の種類に関係なく 22.4L のはずである。

しかし、実際には、その体積が 22.4L より明らかに小さい気体も存在する。

このような気体には、気体分子に、分子量が大きい、極性が大きいなどの特徴がある。

そのため、分子間力が大きく、体積が 22.4L より小さくなる。

22.4L とみなせる実在気体

H₂ : 22.449

CO : 22.408

N₂ : 22.404

F₂ : 22.403

O₂ : 22.394

希ガス He : 22.424 Ne : 22.428 Ar : 22.397 Xe : 22.444

22.4L からずれる実在気体

CO₂ : 22.262

C₂H₄ : 22.259

H₂S : 22.152

NH₃ : 22.078

C₃H₆ : 21.976

SO₂ : 21.890

CH₃OCH₃ : 21.856

B. 理想気体と実在気体

理想気体：理想気体の状態方程式 $PV = nRT$ に厳密にしたがう気体（仮想の気体）

実在気体：現実の気体）

ファンデルワールスの状態方程式に近似的にしたがう。

ファンデルワールスの状態方程式とは、

理想気体の状態方程式の圧力と体積のそれぞれに、

実在気体の分子間力による効果と分子の大きさによる効果に対する補正を

加えた状態方程式である。

$$\left(P + \frac{n^2 a}{V^2}\right)(V - nb) = nRT \quad (a, b \text{ は気体の種類で決まる定数})$$

	分子の熱運動	分子間力	分子の大きさ	分子の質量	理想気体の状態方程式	状態変化
理想気体	ある	ない	ない	ある	使える	常に気体
実在気体	ある	ある	ある	ある	使えない	起こる

C. 実在気体の理想気体からのズレの指標：圧縮率因子 Z

実在気体は十分圧力の低いところでは理想気体の状態方程式にほぼ従うが、圧力が高くなるにつれて理想気体の状態方程式からのずれが大きくなる。

圧縮率因子 Z の定義

実在気体の理想気体からのズレを表す指標に圧縮率因子 Z がある。

これは、同温同圧下における理想気体の体積に対する実在気体の体積のことで、

$$\text{圧縮率因子 } Z = \frac{\text{実在気体の体積}}{\text{理想気体の体積}} \quad (\text{同温・同圧条件下})$$

で表される。

ここで、

圧力 P 、温度 T の下での 1mol の理想気体および実在気体の体積をそれぞれ V_i 、 V_r とすると、

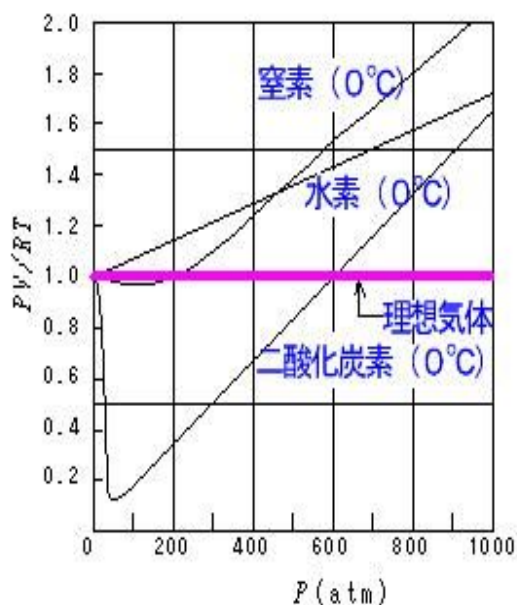
$$\text{圧縮率因子 } Z = \frac{V_r}{V_i}, \quad 1\text{mol の理想気体の状態方程式より } V_i = \frac{RT}{P}$$

$$\text{よって、圧縮率因子 } Z = \frac{V_r}{V_i} = \frac{PV_r}{RT}$$

グラフで実在気体の理想気体からのズレを表す場合、 $Z = \frac{PV_r}{RT}$ を縦軸、圧力を横軸にとる。

グラフの見方

下図のグラフの $P=0$ における $\frac{PV_r}{RT}$ の P は $\lim_{P \rightarrow 0} \frac{PV_r}{RT}$ の値である。



左のグラフの説明

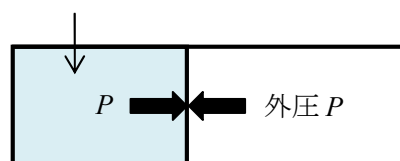
1mol の実在気体に大きさ P の外圧を加えると、実在気体の圧力 = 外圧 = P となるまで実在気体の体積が変化する。

このときの実在気体の体積 V_r を測定し、

外圧 P (横軸) と $\frac{P \text{ (実在気体の圧力)} \times V_r}{R \times \text{実験条件における } T}$ (縦軸)

の関係をグラフにする。

実在気体 (体積 V_r)



D. 実在気体の理想気体からズレ (圧縮率因子 Z) に関与する 2 つの因子

実在気体の理想気体からのズレ, つまり, 圧縮率因子 Z が 1 でない原因となる因子に, 分子間力と分子の大きさがある。

分子間力は, 実在気体の体積を理想気体のそれより小さくする因子, すなわちとする因子としてはたらく。

分子の大きさは, 実在気体の体積を理想気体のそれより大きくする因子, すなわち $Z > 1$ とする因子としてはたらく。

1. 分子間力の影響

実在気体の体積に対する分子間力の関与が分子の大きさより顕著な条件の下では, 実在気体の体積は同じ条件下の理想気体の体積より小さくなる。

すなわち $Z = \frac{V_r}{V_i} < 1$ となる。

逆に, $Z < 1$ ならば分子間力の影響が顕著であるといえる。

解説

分子間力は分子量が大きいほどまた極性が大きいほど大きいので,

二酸化炭素やアンモニアは条件によっては分子間力の影響を顕著に受け $Z < 1$ となる。

一方, 水素は低分子であるため分子間力が非常に小さく, 後述する分子の大きさの影響の方が常に顕著であるため $Z > 1$ となる。

1-1. 分子間力の影響をできるだけ排除するには?

1 つには, 十分高温にすればよい。

高温にすると, 気体分子の熱運動が激しくなり, 分子間力の影響が小さくなるからである。

もう 1 つには, 気体分子のモル濃度を十分小さくすればよい。

分子間の平均距離が十分大きくなり, 分子間力が無視できるからである。

2. 分子の大きさの影響

実在気体の体積に対する分子の大きさの関与が分子間力より顕著な条件の下では,

$Z = \frac{V_r}{V_i} = \frac{PV_r}{RT} > 1$ となる。

逆に, $Z > 1$ ならば分子の大きさの影響が顕著であるといえる。

解説

気体分子が自由に動き回れる空間の体積を V とすると,

分子間力が無視できる場合, 気体の物質量を n とすると,

$$PV = nRT \quad \dots \textcircled{1}$$

が成り立つ。

2-1. 理想気体の場合

「理想気体の入った容器の体積＝理想気体の体積」

理想気体分子には大きさが無いから、①式において、

「 V ＝理想気体の体積」

よって、

$$\text{容器の体積} = \text{理想気体の体積} = \frac{nRT}{P} \quad \dots \textcircled{2}$$

2-2. 実在気体の場合

「実在気体の入った容器の体積＝実在気体の体積」

実在気体分子には大きさがあるから、実在気体の入った容器には、

気体分子が自由に動き回れる空間と気体分子が入り込めない空間がある。

よって、

実在気体の入った容器の体積

＝実在気体の体積

＝気体分子が自由に動き回れる空間の体積＋気体分子が入り込めない空間の体積

となる。

また、①より、

気体分子が自由に動き回れる空間の体積については、 $V = \frac{nRT}{P}$ が成り立つから、

$$\text{容器の体積} = \text{実在気体の体積} = \frac{nRT}{P} + \text{実在気体分子が入り込めない空間の体積} \quad \dots \textcircled{3}$$

2-3. 理想気体と実在気体の体積の比較

同温・同圧・同物質量の条件下では、

②、③より、

$$\frac{nRT}{P} = \text{理想気体の体積} = \text{実在気体の体積} - \text{実在気体分子が入り込めない空間の体積}$$

よって、

実在気体の体積＝理想気体の体積＋実在気体分子が入り込めない空間の体積

ゆえに、

実在気体の体積＞理想気体の体積

したがって、

実在気体の体積に対する分子の大きさの関与が分子間力より顕著な条件の下では、

$$Z = \frac{V_r}{V_i} = \frac{PV_r}{RT} > 1 \text{ となる。}$$

逆に、 $Z > 1$ ならば分子の大きさの影響が顕著であるといえる。

2-4. 分子の大きさの影響をできるだけ排除するには？

気体分子が入り込めない空間の体積を排除体積といい、

排除体積 = 分子の体積 × 分子数 × 4 である。

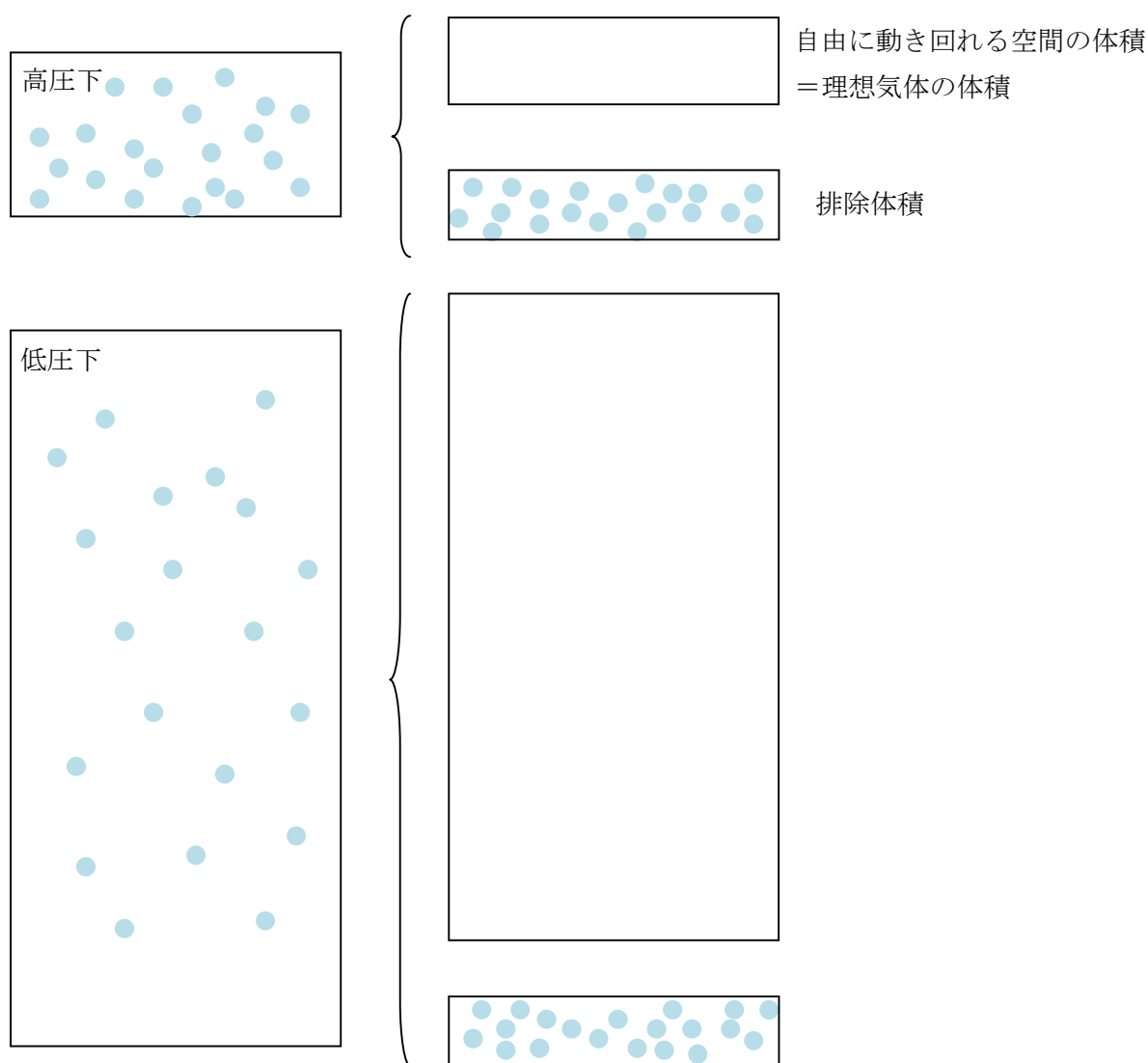
これを a とすると、

$$Z = \frac{V_r}{V_i} = \frac{V_i + a}{V_i} = 1 + \frac{a}{V_i} > 1$$

V_i は圧力に反比例するから、高圧にすればするほど $\frac{a}{V_i}$ は大きくなっていく。

すなわち Z が 1 よりどんどん大きくなっていく。

逆に、低圧にすればするほど $\frac{a}{V_i}$ は 0 に近づいていく。すなわち Z が 1 に近づいていく。



まとめ

分子間力は $Z = \frac{V_r}{V_i} < 1$ となる原因として、

分子の大きさは $Z = \frac{V_r}{V_i} > 1$ となる原因としてはたらく。

分子間力の影響は、低温で顕著、分子の大きさの影響は高圧で顕著なので、
実在気体が理想気体に近い振る舞いをするには十分な高温と低圧が必要である。

補足

ファンデルワールスの状態方程式

実在気体の圧力と実在気体の体積を補正し、理想気体の状態方程式の形にしたのが
ファンデルワールスの状態方程式である。

実在気体の圧力と理想気体の圧力

気体の圧力は、気体分子が容器の壁に衝突する勢い（力積）に比例するが、
実在気体の場合、壁に衝突直前の分子は背後の分子から後ろ髪を引かれるように分子間力
を受けるためその勢いが削がれる。

そのため、実在気体の圧力は同じ条件下の理想気体の圧力より小さくなる。

実在気体の体積と理想気体の体積

理想気体の状態方程式の体積は気体分子が自由に動き回れる空間の体積と同じである。
実在気体の体積は、その分子の大きさのため、実在気体が自由に動き回れる空間の体積よ
り常に大きい。よって、同じ条件下の理想気体の体積より常に大きい。

1. 理想気体の圧力を実在気体の圧力を使って表すとどうなるか？

圧力の大きさは「分子が容器の壁に衝突するときの衝撃力と衝突頻度の積」に比例する。
まずは、気体分子が壁に衝突するとき壁に及ぼす衝撃力と分子間力について、
1つの分子が容器の壁に接近し、衝突しようとするまさにその瞬間について考えると、
このとき、他の気体分子はいままさに衝突せんとする気体分子より容器の内側にある。
そのため、衝突しようとする分子は、他の気体分子から受ける分子間力のため、壁への
衝突の勢いがそがれてしまい、圧力が理想気体のそれより小さいものになってしまう。

分子間力の大きさは気体分子のモル濃度 $\frac{n}{V_r}$ (mol/L) に比例する。

したがって、壁におよぼす衝撃力は $\frac{n}{V_r}$ (mol/L) に比例して小さくなる。

続いて、分子の壁への衝突頻度と分子間力について、
衝突頻度は分子の速さに比例する。

分子は分子間力により運動が束縛されるので、その速さも小さくなる。

よって、衝突頻度も気体分子のモル濃度 $\frac{n}{V_r}$ (mol/L) に比例して小さくなる。

以上より、実在気体の圧力は、 $\frac{n^2}{V_r^2}$ に比例して小さくなる。

ここで、比例定数を a とすると、

実在気体の圧力 P_r は、理想気体の圧力 P_i より $\frac{n^2 a}{V_r^2}$ 小さい。

$$\text{すなわち } P_r = P_i - \frac{n^2 a}{V_r^2}$$

よって、

$$P_i = P_r + \frac{n^2 a}{V_r^2} \quad \dots \textcircled{1}$$

2. 理想気体の体積を実在気体の体積を使って表すとどうなるか？

実在気体には分子の大きさがあり、理想気体は分子に大きさがないから、

実在気体の体積 V_r = 気体分子が自由に動き回れる空間の体積 + 排除体積

理想気体の体積 V_i = 気体分子が自由に動き回れる空間の体積

よって、

$$\begin{aligned} \text{理想気体の体積 } V_i &= \text{気体分子が自由に動き回れる空間の体積} \\ &= \text{実在気体の体積 } V_r - \text{排除体積} \end{aligned}$$

1mol の実在気体分子が占める排除体積を b とすると、 n mol の実在気体の排除体積は nb

よって、

理想気体の体積を同物質量の実在気体の体積を使って表すと、

$$V_i = V_r - nb \quad \dots \textcircled{2}$$

3. ファンデルワールスの状態方程式

理想気体の状態方程式

$P_i V_i = nRT$ と①, ②より、

$$\left(P_r + \frac{n^2 a}{V_r^2} \right) (V_r - nb) = nRT$$

67. 気体の燃焼と圧力

(2)

水以外の物質の状態は、すべて気体のみだから、

それらの各物質量 n は、 p をその物質の分圧とすると、 $n = \frac{V_B}{RT} \cdot p$ と表せる。 $\frac{V_B}{RT}$ は一定だから、 n は p に比例する。したがって、水以外の物質については、物質量の代わりに、分圧 p で化学量論的に扱ってよい。

	C_3H_8	+	$5O_2$	\rightarrow	$3CO_2$	+	$4H_2O$
反応前の分圧	x		y		0		/
変化	$-x$		$-5x$		$+3x$		/
反応後の分圧	0		$y-5x$		$3x$		3.6×10^3

よって、反応後の容器内の圧力は、

$$(y-5x)+3x+3.6 \times 10^3 = y-2x+3.6 \times 10^3 \text{ Pa} \quad \dots \text{(答)}$$

(5)

別解

生成した水がすべて水蒸気と仮定すると、その分圧は $4x$ となる。これと、 $x = 0.3 \times 10^4 \text{ Pa}$ より、 $4x = 1.2 \times 10^4 \text{ Pa}$ ところが、水蒸気圧 $3.6 \times 10^3 \text{ Pa}$ より、

実際に水蒸気として存在する水の物質量は、

$$\text{生成した水の物質量の} \frac{3.6 \times 10^3}{1.2 \times 10^4} \text{ である。} \quad \dots \text{①}$$

また、

 $x = 0.3 \times 10^4 \text{ Pa}$ は、物質量に換算すると、(4)より、 $2.0 \times 10^{-2} \text{ mol}$ だから、

生成した水の物質量は、

$$4 \times 2.0 \times 10^{-2} = 8.0 \times 10^{-2} \text{ mol} \text{ である。} \quad \dots \text{②}$$

①, ②より、

水蒸気として存在する水の物質量は、

$$\frac{3.6 \times 10^3}{1.2 \times 10^4} \times 8.0 \times 10^{-2} = 2.4 \times 10^{-2} \text{ mol} \quad \dots \text{(答)}$$

である。

68. 混合気体の圧力

状態変数を (P, V, n, T) と成分表示すると混乱しない。

(ア)

$$\text{容器 A 内の状態 } (P, V, n, T) = \left(P_A, 1.0, \frac{1.2}{30.0}, 300 \right)$$

$$PV = nRT \text{ より, } P_A \times 1.0 = \frac{1.2}{30.0} \times 8.3 \times 10^3 \times 300$$

$$\therefore P_A = 0.996 \times 10^5 \approx 1.0 \times 10^5 \text{ Pa} \quad \dots \text{(答)}$$

(イ)

別解：(ア) の結果を利用することで、 R を使わずに解く

$$\frac{PV}{nT} = \text{一定について, エタンの物質量および系の温度は一定だから,}$$

エタンについて、コック C を開く前後で、 $PV = \text{一定}$ が成り立つ。

コック C を開いたときのエタンの分圧を $P_{\text{C}_2\text{H}_6}$ とすると、

$$P_A \cdot 1.0 = P_{\text{C}_2\text{H}_6} \cdot (1.0 + 2.0)$$

$$P_A = 0.996 \times 10^5 \text{ Pa より,}$$

$$P_{\text{C}_2\text{H}_6} = \frac{P_A}{3} = 0.332 \times 10^5 \approx 0.33 \times 10^5 \text{ Pa} \quad \dots \text{(答)}$$

(ウ) (エ)

別解： R を使わずに解く

$$\frac{PV}{nT} = \text{一定について, コック C が開いているから容器 A の圧力と容器 B の圧力は等しい。}$$

よって、容器 A 内と容器 B 内の間で、 $\frac{V}{nT} = \text{一定}$ が成り立つ。

そこで、容器 A 内の気体の物質量を n_A 、容器 B 内の気体の物質量を n_B とすると、

$$\frac{1.0}{n_A \cdot (273 + 27)} = \frac{2.0}{n_B \cdot (273 + 227)} \text{ より, } 6n_A = 5n_B$$

$$\therefore n_A : n_B = 5 : 6 \quad \dots \text{①}$$

$$n_A + n_B = \text{全物質量} = \frac{1.2}{30.0} + \frac{8.0}{32.0} = 0.29 \text{ mol} \quad \dots \text{②}$$

①, ②より、

$$\text{容器 B 内の気体の物質量} = \frac{6}{5+6} \times 0.29 \approx 0.16 \text{ mol} \quad \dots \text{(エ)}$$

$$\text{容器 B 内の圧力} = \text{容器 A 内の圧力} = \frac{5}{11} \times 0.29 \times 8.3 \times 10^3 \times 300 \\ \approx 3.3 \times 10^5 \text{ Pa} \quad \dots \text{(ウ)}$$

69. 気体の温度，体積の関係

(1)

ピストン移動前後の A 室の圧力

コック a と b が開いているから，移動前の圧力は，

大気圧=A 室の圧力=B 室の圧力= 1.0×10^5 Pa

移動後も，コック b は開いているから，

A 室の圧力=B 室の圧力=大気圧= 1.0×10^5 Pa

よって，A 室の圧力は， 1.0×10^5 Pa で一定である。

ピストン移動前後の A 室の気体の物質量

コック a が閉じられると，A 室が閉鎖されるから，物質量は一定である。

よって，A 室について， $\frac{PV}{nT}$ = 一定を適用すると， $\frac{V}{T}$ = 一定となる。

そこで，移動前の A 室の体積を V_0 ，A 室の体積変化を ΔV とすると，

$$\text{移動前後において，} \frac{V_0}{273+27} = \frac{V_0 + \Delta V}{273+57}$$

$$\therefore \Delta V = \frac{1}{10} V_0 = \frac{1}{10} \times 50 \times 20 = 100 \text{ cm}^3 \quad \dots \textcircled{1}$$

$$\text{移動距離を } x \text{ cm とすると，} \Delta V = 20x \text{ cm}^3 \quad \dots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{1}, \textcircled{2} \text{ より，} 20x = 100 \quad \therefore x = 5.0$$

よって，ピストンは，右へ 5.0cm 移動した。 \dots (答)

(2)

コック a と b は閉じられたままだから，

移動後も，A 室の気体の物質量=B 室の気体の物質量

また，圧力がつり合っているから，A 室の圧力=B 室の圧力

よって，A 室と B 室について， $\frac{PV}{nT}$ = 一定を適用すると， $\frac{V}{T}$ = 一定となる。

そこで，移動前の A 室の体積=B 室の体積= V_0 ，A 室の体積変化を ΔV とすると，

B 室の体積変化は $-\Delta V$ だから，

$$\frac{V_0 + \Delta V}{273+57} = \frac{V_0 - \Delta V}{273+27} \quad \therefore \Delta V = \frac{1}{21} V_0 = \frac{1000}{21} \text{ cm}^3$$

移動距離を y cm とすると， $\Delta V = 20y \text{ cm}^3$ より，

$$20y = \frac{1000}{21} \quad \therefore y \approx 2.38$$

よって，ピストンは，右へ 2.4cm 移動した。 \dots (答)

70. 密閉容器内の圧力と水蒸気圧

(1)

グラフより

	P	V	PV
A	0.48×10^5	1.0	0.48×10^5
B	0.30×10^5	2.8	0.84×10^5
C	0.21×10^5	4.0	0.84×10^5

水がすべて水蒸気になると、気体の物質量が一定になるから、

$PV = nRT = \text{一定}$ になる。

よって、B点とC点では、水はすべて水蒸気になっている。

このとき、水蒸気の物質量と窒素の物質量の比は2:1だから、

$$\text{B点の水蒸気分圧} = 0.30 \times 10^5 \times \frac{2}{2+1} = 0.20 \times 10^5 \text{ Pa}$$

$$\text{C点の水蒸気分圧} = 0.21 \times 10^5 \times \frac{2}{2+1} = 0.14 \times 10^5 \text{ Pa}$$

また、B点は水がすべて水蒸気になる点だから、

B点の水蒸気圧は、飽和水蒸気圧と等しい。

A点の水蒸気圧は飽和水蒸気圧だから、

$$\text{A点の水蒸気圧} = 0.20 \times 10^5 \text{ Pa}$$

定性的には、

水蒸気と液体の水が共存するとき、水蒸気圧は飽和水蒸気圧になっている。

圧力を下げると水蒸気圧が一時的に飽和水蒸気圧より小さくなる。

すると、飽和水蒸気圧になるべく水が蒸発する。

圧力を下げることが繰り返すうちに水はすべて水蒸気となる。

よって、圧力が小さい範囲の曲線BCの水はすべて水蒸気である。

71. 水銀柱の高さと蒸気圧

(1)

水銀の密度を $d \text{ g/cm}^3$ とすると, $d \frac{\text{g}}{\text{cm}^3} = d \frac{10^{-3} \text{ kg}}{(10^{-2} \text{ m})^3} = d \times 10^3 \text{ kg/m}^3$ より,

高さ $760.0 \text{ mm} = 760.0 \times 10^{-3} \text{ m}$ の水銀柱の 1 m^2 あたりの質量は,
 $760.0 \text{ m} \times 10^{-3} \times d \times 10^3 \text{ kg/m}^3 = 760.0d \text{ kg/m}^2$

よって,

水銀柱 1 m^2 あたりの圧力は,

$$760.0d \text{ kg/m}^2 \times 9.800 \text{ m/s}^2 = 7448d \text{ kg/(m/s}^2)$$

この水銀柱とつり合う圧力は, $1.013 \times 10^5 \text{ kg/(m/s}^2)$ だから,

$$7448d = 1.013 \times 10^5$$

$$\therefore d \approx 13.60$$

よって, 13.6 g/cm^3

補足

物理選択者に有利な問題であるが, 東工大は物理・化学指定である。